

《書評》

章詒和著／横沢泰夫訳 集広舎発行・中国書店発売

『嵐を生きた中国知識人
——「右派」章伯鈞をめぐる人びと』

(中国文学) 田畑 佐和子

本書の著者・章詒和は、かの有名な「右派」章伯鈞の娘である。原書は2003年出版の『往事並不如煙』(のち『最後の貴族』と改名)で、出るとすぐ大変評判になったが、やがて発禁処分を受けた。翌年たまたま北京に旅行した私は、これを探しまわり、道端の露天で海賊版を手に入れて大喜びしたのを覚えている。今回の日本語版はその人民文学社版ではなく、香港版を定本にしているということで、たしかに前者よりもかなり歯に衣着せぬ書き方が目立ち、分量もやや多い。いずれにせよ本書は、毛沢東の「陽謀」たる反右派闘争に関する、非常に価値ある回想の一書といえよう。

全体は6章よりなり、各章別に、史良、儲安平、張伯駒夫妻、康同壁母娘、聶紺弩、羅隆基といった人々が主人公として語られる。そして全編を通じて、彼らと深く交わった著者の父・伯鈞や母・李健生の姿が細やかに描かれ、詒和自身の少女時代、青春時代も浮かび上がる。これらの人々はみな中国の有名人ではあるが、日本の読者にはなじみのない名前もあろう。まず簡単に彼らを紹介しつつ各章の内容を要約してみよう。

第1章の史良は、抗日戦争中からすでに、国民党の弾圧と闘う女性弁護士として有名で、1942年成立の中国民主同盟の中心的人物、建国後は初代の司法大臣に任命されるなど、いわば超エリート女性である。50年代前半、章伯鈞と史良は同じく民主同盟の中核として、公私ともにきわめて親しい間柄だった。史良の発散する上流社会的雰囲気は、少女時代の詒和を魅了し続けた。ところが57年6月に毛沢東が突如「反右派」の嵐を巻き起こすやいなや、史良は驚くべき変身(変心)を遂げる。章伯鈞が事態の急変に驚愕して彼女のところ

に駆けつけ、共産党への疑念や不平をぶちまけたわずか数日後、彼女はその話のすべてを公開して章を徹底的に批判したのだ。美しく聡明な「貴婦人」であった史良の、「裏切り女」への変貌は、どんな芝居よりもドラマチックで、読む者を仰天させる。長く彼女の「裏切り」を許せなかった著者の母も、後に著者の監獄からの釈放について史良の助力を請い、晩年にはふたたびかつての友誼を回復する。実は史良の「酷薄さ」とみえたものも、政治運動がもたらした人間性への打撃の、ほんの序幕の挿話に過ぎなかったのだ。

2章の主人公・儲安平について著者は言う、彼について書かねばならぬわけは、章伯鈞が生前「自分がもっとも被害を与えた人」として彼のことを気にかけていたからだ、と。儲安平は57年、とびきり「悪名高い」文章・いわゆる「党の天下」を書いたため、完膚なきまで叩かれたのだが、もとはといえば章伯鈞が儲を見込んで、民主同盟の新聞『光明日報』に儲を招いたのが災いのもとだった。儲は張り切って新聞を出すとともに、「百家争鳴」の呼びかけに呼応して、ずばりと党の支配の根幹に切り込んだのだ。

著者は56年春の「百花斉放・百家争鳴」や『光明日報』『文匯報』『大公報』の3紙を民間に戻す方針などに見られた、党の言論政策の緩和の傾向に、章伯鈞たち言論人がいかに鼓舞され、やる気をかきたてられたかを活写する。儲と章とは、建国後の民主党派の任務は「政治に対する監督である」と意見が一致。そして『文匯報』が「百花斉放」「百家争鳴」を重点とするなら、『光明日報』は「長期共存、相互監督」を主張しよう、これは共産党との「再度の合作」だと考えた。57年春の儲は、ほとんど建国前に雑誌『観察』をやっていたころの(潑刺たる)精神状態に戻っていた、と著者は言う。儲や章ばかりでなく、口をつぐんでいた民主党派の知識人たちが、「いよいよ自分たちの出番!」と立ち上がり、新聞という事業に取

り組み積極的に発言した。彼らの使命感と興奮、自信と決断が輝きを放ち始めた。だが次の瞬間には、すべてが「陽謀」のワナに次々と落ち込んで行く。つい「権力」の本質を忘れた彼らが、モグラ叩きよろしく叩かれてゆく様には、荒ぶる神に懲罰を受けて滅ぼされる英雄たちさながら、真に悲劇的なものがある。中国で自由な言論が基本的に扼殺される現場を再現したこの章は、著者の父への思いのこもる、力が入った1章だ。

第3章の主役、張伯駒夫妻については、私はこの本ではじめて知った。伯駒もやはり57年に「右派」とされた人だが、著者の重点は、両親と彼らとの趣味の交わりや、著者自身が絵を習いに通って知った彼らの日常などに置かれる。張伯駒夫妻の姿から見えてくるのは、中国の上層社会、金持ちの坊ちゃんとはどんなものかということ。金を稼ぐため働く必要のない人、それどころか金に糸目をつけず美術品骨董品を買い集め、それを惜しげもなく国に献納する人。京劇を愛するあまり自分も舞台に立つし、中国文人必須の教養である詩作や書画の鑑識眼は一流、しかも情に厚く、心意気に秀でる「文人」。中でも彼が著者に与えた最大の影響は、彼女が伝統演劇を専攻に選んだことであろうか。

第4章は、康有為の娘・同璧と、彼女の娘の羅儀鳳を主人公に、文字通りの「最後の貴族」、上流婦人の姿を描く。母の同璧はアメリカの大学で学んだ名だたる才女、娘も燕京大出の教養豊かな女性、二人は「右派」のささやかな会の常連になる。文革時、章伯鈞の家はガサ入れなどで危険になったので、詒和は彼女らの邸宅に避難し、貴族母娘のつましいが優雅な生活に親しく接する。文革後、出獄した著者が北京に戻ると、二人はすでになく、その立派な邸宅も、党の権力者に奪われてしまっていた。

第5章、聶紺弩。この人と著者の関わりは、監獄が結ぶ縁というところか。文革で投獄されてい

たこの二人を、聶の妻と著者の母とが力をあわせて救出する経緯が主たる内容である。30年代から学識豊かな文人、かつ古参党员として知られた聶の、苦難の晩年を、著者自身の蒙った災厄とあわせて語る。

第6章、羅隆基。57年、毛沢東により反党組織「章羅連盟」の一方の頭とされた羅隆基は、実は民主同盟の中では章伯鈞と「犬猿の仲」、対立するセクトのトップ同士だった。アメリカ留学帰りでいつも颯爽としていた羅は、「章羅連盟」といわれて激怒し、章の家までやってきて「お前と連盟などするか！」とステッキを投げつけた。

章が誤りを認めて自己批判したあと、民主同盟の仲間からの厳しく執拗な批判、10年も同棲した愛人の浦熙修からの罵倒にもめげず、自説の正しさを主張した羅も、半年後にはついに全面降伏した。かくて右派として処罰を受け、もはや何の発言権も仕事もなくなつた暇人になった章と羅は、しだいに親しく往来するようになる。「章羅連盟」をやりきたよ、と言って羅が章の家を訪ねて来るくんだり、可笑しくまたもの悲しい。二人の間では、毛と共産党への厳しい批判が飛び交うが、それがどんなに正鵠を得ていても、もはや何の役にも立たないのだ。

60年代初、この二人を大喜びさせることが一つだけあった。大英百科全書が57年の中国「反右派運動」の項目の中で、「社会主義制度の下で民主政治の実行を要求した」として章・羅の名前を載せたのだ。章は著者に「自分がこのように歴史に記されたことに大満足だ、これも毛沢東のおかげだから彼に感謝せねば」と言った。そして著者はいま「父と羅はまだ右派の身分が改められないことで歴史に銘記された」と誇りをもって書きつけている⁽¹⁾。

本書が再版時に「最後の貴族」と改名された理由はどうあれ、本書の中心は、父親をはじめとす

る57年「右派」の中心人物たちの主張、思想、そして運命だと、私は受け取った。文革後に、膨大な数の「右派分子」が「平反」されて以来、自分の災厄、苦難を書いて公開した被害者もまた数え切れない。本書の主人公たちよりさらに残酷な迫害、無残な悲劇もあまた書かれた。しかもその人々の経歴にしばしば「誤って右派とされた（原語「錯劃為右派」）という接頭語がついているように、当人にとって右派というレッテルは「わけがわからん」「降ってわいた」災難であったり、こじつけや曲解の結果であった場合も多い。

本書がそうした大小の「右派分子」の受難の記録と違うのは、章・羅たちが以前から政治のいわばプロであり、政治結社たる民主党派のメンバーであって、自覚的に共産党独裁への批判の観点を持っていたことだろう。羅隆基の「平反委員会」（党員と非党員が協議して冤罪を審査しなおす）の主張、章伯鈞の「政治設計院」、儲安平の「党の天下」（この二者は党の独裁への批判）論が、「右派」の三大反動理論だといわれているのだが、これらの主張は故意に「おびき出された」ものとはいえず、独裁者にとっての危険は大きかった。文革後に99%の右派が平反されたのに、彼らがいまだに「右派」という罪名をかぶせられていることは、「司法の確立（言論による処罰の廃止を含め）」「多党制か独裁か」などの問題が、いまもくすぶる火種であることを示す。彼ら「確信右派」は力では完敗し、迫られて「自己批判」はしたが、思想改造を受け入れてはおらず、本書で見ると、何の力もない二人だけの「章羅連盟」議論をずっと続けていたらしい。右派退治からすでに半世紀たったが、彼らの政論の見直し、完全な復権がなされるのは、まだ先のことなのか。

さて訳書で二段組400ページにもなる本書の大きな価値が、こうした大筋以外の、生活や心理の細密な描写にもあることも言っておかねばならない。「右派」とされた後の章の生活の意外な「豪

華さ」、北京の奥深くにひっそり残る「上流社会」、
「飢饉時代」の幹部への「配給」のランク付けなど、当事者ならではの書けぬ実態の細部が面白い。また羅隆基の女性関係の華やかさ、それが引き起こした災いなどのように、艶っぽいエピソードも豊富だ。著者の筆は、効果的にディテールを書き込み、それぞれの人の「悲劇」的最後を際立たせて、一種演劇的な効果をあげている。単に回想をさらりと書いたものとはちがう、著者の創作的な才能の表現ともいえよう。

これに関連して最後に疑問をひとつ。本書の記述は、すべて事実とみなしてよいのだろうか。思い込みや調査不足のため生じた誤解や誤記は免れないとして、一部には著者の意識的な「脚色」もあるのだろうか。たまたま私が目にした文章が、聶紺弩の章についてかなり重大な誤認・誤記を指摘していたので気になった⁽²⁾。著者がなんらかの反論をしているのかを知りたいと思う。

大部な本書を、完訳して丁寧な注も付した訳者の労を多としたい。ぜひ多くの日本人にも読んでほしいものだ。注文としては、詩や慣用句、文語文などの訳や説明に、もうひと工夫ほしかった。注(1)この春訪日された著者は、質問に対し「中央一級の右派分子の中でいまだにレッテルが除かれていないのは次の5人」といい、サラリと名前を書き出した。章伯鈞、羅隆基、儲安平、彭文应、陳仁炳。

注(2)姚錫佩「我所知道的周顥」『新文学史料』2004年4月。

(2007年10月刊、412ページ、税込3,990円)